

自律と支援の微妙なバランスを求めて

「自分がしてほしいことを他人にせよ」(黄金律)、それが道徳の基本だ、という昔からの教えを、ある劇作家は、「自分がしてほしいことを他人にしてはならない、人の好みは様々だからだ」と揶揄しました。まさに、価値観の多様性を重んずる教育の立場からすれば、普遍妥当な黄金律などない、という彼の主張は正鵠を射ている、と言うべきでしょう。学生にどのような自由を、どの程度認めるか、という具体的な問題に関しても、事態は同様だと思われれます。いつでも、どんな状況でも妥当する唯一の正解などは存在しません。

かつて国立大学は、「学生の自由」を隠れ蓑にして、内実は学生をほったらかしにしてきたという歴史があります。究極の「大人扱い」と言えば聞こえはいいかもしれませんが、そこには、学生に対する教職員の「無関心」と「怠惰」が潜んでいました。

しかし、それが一旦批判されると、わが国でしばしば起きたように、振り子が逆に大きく振れ、今度は無原則的な揺れ戻しが大手を振ってまかり通るようになりました。学生は「神様、お客様」というサービス至上主義です。学生を言わば幼児扱いして、手取り足取りの過保護状態が目指すべき目標となりました。その振り子の極点もまた健全ではない、ということはおそらくです。

では、学生支援の本質はどこにあるのでしょうか？ 私たちは、それを、「各人の自律を実現するための学生支援」に求めるべきだと考えます。目指すべきは、各人の状況において確立されるべき自律的な学修態度、生活態度であり、促すべきは、各人がその行動に責任を負う独立した社会人への自己変革です。

そのために必要なことは、徹底した合理的支援を行うと同時に、過剰な保護・過度な介入を排すること、この2つを同時に実現することです。冷静に考えてみれば、この2つは相矛盾する方針ではありません。しかしまた、抽象的なレベルでの一般的な方針の確認によって果たされる課題でもありません。答えは、その都度、徹底した支援と自律の促進とを両立させる個々の具体的な状況の中にあります。私たちは、常に、支援と自律の微妙なバランスを細心の注意を払って実現しなければならないのです。一言でいえば、学生に対する「適切な大人扱い」です。

私たちが経験してきた時代の学生像はもはや過去のものであり、過去の個人的な経験に頼って学生に接するのは的外れであるばかりか、時には危険です。私たちが学生だった頃の悩みや相談事と今の学生たちのそれとは本質的に異なる、と考えた方がいいかもしれません。例えば、今の大学生においては、デリケートな心の持ち主は自閉的な傾向をますます強める一方で、ストーカー行為や、セクハラ、アルハラなど他者に対する極端に無神経な態度も目立ちます。また「心の病」を抱える学生の数が以前よりずっと増えているという実感は、皆さんも、現場でお持ちのことと思います。

そこで、皆さんには、求めるべき「学生支援」の本来の姿を常に忘れることなく、まずは本書にあるような様々な事例や対処法に、虚心に立ち返って頂きたいと思います。もはや「学生支援・学生相談」は、一人の優れた教員が手腕を発揮するような活動ではありません。組織的な仕方でも、また専門家チームと協働して、ノウハウを共有し蓄積しながら果たすべき事柄です。

金沢大学で学んだすべての学生が「充実した学生生活を送り、自律した個人としての人生の態度を獲得することができた」と思い返せるようになること、本書は、それを実現するための良きガイドとなるでしょう。

副学長（教育担当）
柴田 正良